

## 第二人

糸島郡志摩町 原田 八重

「ごきょうだいは何人ですか」尋ねられることがある。「弟が2人いましたが亡くなりました」とお答えする。あきらめてはいるが、フッと寂しくなる。

父は姉3人の末子。母も妹が2人。どちらも女系家族で、男の子を待ちわびていたのに生まれたのが私。家族の落胆ぶりをよく聞かされた。3年後に弟が生まれた時は大変なお祝いをした由。しかしこれはまた悲劇の始まりでもあった。小児まひのため、全く自由のきかないからだになった。食事をはじめ、日常生活すべて人手がいった。

太平洋戦争が始まった翌年、彼は徴兵検査を受けることになった。どのような証明書もだめで、何が何でも本人が出頭しなければならなかった。8月下旬、瓦も飛ぶ暴風雨の中、車も入れぬ坂道を、合羽をかぶせられた弟は父の引くりヤカーで隣町の検査場に向った。母が付き添った。ずぶぬれで検査官の前にうずくまった。

母は数日寝込んだ。

私が高校教師だった時、「兵隊になるのが嫌なら徹底して拒否すればよいのでは？」「あるいは逃げてしまえば？」など半ば冗談のように言う男生徒がいた。私は彼等の集会で弟のこの徴兵検査の話をしたことがある。非常に真剣に聞いてくれた。

彼は、家族はもとより近所の人達からも親切にされ、44歳で亡くなった。老衰の感じであった。

3歳下の次の弟は、心身共に申し分のない少年に成長した。我が家にとって、正に光り輝く存在だったといえる。かけがえのないこの弟は、当時の国にとっても貴重な一員だったわけである。成績もからだも勝れているとして、中学校からたったひとり予科練に推薦された。彼は合格して家を去った。お祝いに多くの人が訪ねて来られた。笑顔で応対しつつ、物置で泣く祖母や母を見た。面会も許されぬ訓練にとびこんでいった。ようやく面会が許され、父と私は土浦を訪ねた。キチッと型にはめられたような彼等を見た。弟でもあり、また珍しい人を見るような気がした。プールに何回も何回もつき落とされた水泳訓練のこと、中でも耳に残るのは「お前たちは消耗品である」といつも言われているとか、これをサラッと話してくれた弟のこぼれである。

彼はサイパンの空に散った。昭和19年7月8日、19歳。

弟の遺品がひとつある。みごとな船の模型である。予科練の試験を受けた弟が、その結果を待つ間にこしらえたものである。模型店に行けば何でも揃っているいまとちがう。結果待ちのいらいらをまぎらわせていたようすが伺える。長さ50cm位で木をけずり、かまぼこ板を張り合わせたりしている。裁縫箱から糸巻きを貰い、縫い糸を張りめぐらせたりひとつひとつに工夫と丹精がみえる。15歳か16歳の少年の思いつめた1日がしのばれる。

実はこの船の縁で、弟の出撃を見送ったという方にお会いすることができた。

戦死公報は死後3年目に届いた。公報以外にもう1通の公文書がある。佐世保地方復員局人事部長からのもので、昭和22年6月6日付になっている。「最後を確認した者が生存せず、これ以上その実状を究明する見込みがなくなったので戦没認定をする」とある。

1985年7月、読売新聞西部本社が、平和と家族を見つめ直す展覧会を企画された。弟の船が作られたいきさつと共に展示された。

山下吉次郎氏（北九州市）から電話をいただいた。山下氏はセレベス島近くのハルマヘラ島の飛行場を設営した元軍属の方であった。

8月9日、山下氏にお会いし、ゆっくりお話をお聞きした。

飛行場設営に機械力は望めず、すべて人の力だけで作業が進められた。でき上がった飛行場に約70機の部隊がやって来た。翌日もう出撃。山下氏は梅干し弁当2食分を手渡された。お礼のことば以外は非常に無口だったという。すでに死を覚悟していた彼等である。

70人の学徒兵の中に数人の更に若い（幼いともいえる）飛行兵がいたが、その中に弟がいたことは間違いのないと言われた。翼を振って彼等は去った。サイパンの空に向った。送る方は手を振った。絶対帰還のない飛行ということを知り過ぎていた。

氏も何回か命を失いかけて、数百人の軍属の中で帰還できたのは3分の1という。

翼を振って去った弟のこと、40年目にお聞きすることができた。あれからちょうど10年たった。

弟のことを中心に述べたが、当時私は女学校の数学教師だった。学校は閉鎖され、生徒は雑餉隈の飛行機製作工場に動員された。私も寮に泊まり込んだ。生徒達は何交替かで、一日中、小さなナットを磨いた。深夜の空襲警報で全員をまとめ、裏山に避難したことが何回かある。真黒やみの木立をかきわけて逃げ込んだ。米粒の少ない雑すいの日々だったが、不満を口にする者はなかった。できなかった。

彼女たちはいま、お孫さんにあの日の思い出をどのように語っているだろうか。

病弱の父に親戚から時々卵をもらった。配給以外の卵があることが心苦しく、祖母の思いつきで、殻はふろわかしの時にもやしていた。戦時下の食糧事情を高校生に話したことがあるが、なかなか理解してもらえなかった。